琉球大学学術リポジトリ

日本植民地期台湾「皇民文学」の総合的研究：日本人・沖縄人の表現を中心に

メタデータ	言語:
	出版者: 星名宏修
	公開日: 2009-02-25
	キーワード (Ja): 大東亜戦争, 皇民化, 優生学, 国語, 原住民
	キーワード (En): the Greater East Asia War, assimilation, Eugenics, National language, native people
	作成者: 星名, 宏修, Hoshina, Hironobu
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/8907

「20 世紀中国文学」にとって「台湾の文学」とは
（宇野木洋・松浦恆雄編『中国二〇世紀文学を学ぶ人のために』、
世界思想社、平成１５年６月、所収）

１．「中国文学」の必要条件？

「中国文学」が「中国文学」であるための「必要条件」とは、いったい何だろう。魯迅や茅盾などの作品を、私たちは当然のように「中国文学」だと考えているが、何を根拠にこうした「分類」がなされているのか。予想される答えはおそらく２つあるだろう。作家が「中国人」だからというもの、作品が「中国語」で書かれているからというあたりが、ありふれた回答ではないだろうか。だがこの答えは答えとして十分だろうか。同じ問いは、任意の「〇〇文学」（〇〇には国名が入る）にも適用できる。例えば「日本文学の衰退」が話題になって久しいが、この時言われている「日本文学」という自明に思える枠組みを、あまり突き詰めて考えてはいないのではないか。例えば柳美里や梁石日ら「在日」の文学者が書いた作品は、「日本文学」なのか。リービ英雄の作品は？日本に帰化した小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）が、英語で書いた作品群はどうなるのか。おもいつくままに例を出してみたが、「日本人」が「日本語」で書いたもの＝「日本文学」という図式からは、こぼれ落ちてしまうものが決して少なくはない[73]。世界的な文脈で考えてみても、最近注目されている「クレオール文学」を、どこかの国名を冠した「〇〇文学」に腑分けすることの無意味さをイメージすれば、分かりやすいだろう。

それでは「台湾文学」とは、どのようなものだろうか。日本の植民地文学研究において先駆的な業績を残した尾崎秀樹は、「台湾文学についての覚え書」の中で、次のように述べていた。

> 台湾文学という言い方が妥当であるかどうか問題がある。それは日本文学とか中国文学とか、あるいはアメリカ文学とかいう具合にいわれる場合のそれとは異なり、アイルランド文学とかアイヌ文学といわれる場合に似ている。魯迅が日本語で書いても、ワイルドがフランス語で発表しても、その作品が中国文学であり、イギリス文学の作品であることに変りはない。しかし台湾人作家が日本統治下に日本語で発表した作品、朝鮮人作家が同様に日本語で描いた作品はどうであろうか。それはポーランドの作家コンラッドが英国に帰化し、英語で表現したから、彼の作品は英文学として問題にされるということと、根本的に異なった意味を持っている。
>
> 台湾にしても朝鮮にしてもその被圧迫民族の文学のなかに、植民地支配に対する抵抗と屈従のすがたが盛りこまれている。しかもそれを自らの言葉ではなく支配国の言語によってしか表現しえなかった――あるいはそのようにしむけられたことのなかに、植民地文学の重大な問題がはらまれていると思う[74]。

---

[73] 小森陽一は『〈ゆらぎ〉の日本文学』（日本放送出版協会 1998. 9）のなかで、「日本」国籍－「日本人」－「日本語」－「日本文化」を無前提に実体化する発想が、差別と排除の言説を生み出すことを明確に批判している。

[74] 尾崎秀樹「台湾文学についての覚え書」『近代文学の傷痕』（岩波書店 1991. 6）196 頁。

1961年に書かれたこの論文から、今日はやりの国民国家批判の視点が見いだせないのは、不思議なことではない。しかしアイヌやアイルランド、そして台湾の文学（つまりは「植民地文学」）が、それ自体としての存在の枠組みを「問題」視される一方、日本文学や中国文学・アメリカ文学などは、その実体が疑われることのない非対称性は何に由来するのか。「自らの言葉ではなく支配国の言語によってしか表現しえなかった」「植民地文学」を、それぞれの固有名で名付けることが「妥当であるかどうか問題がある」と尾崎は言うが、そもそも文学の創作言語と作家の国籍（あるいは「なにじん」ということ）が、必ずしも一致するわけではないことは、すでに見た通りだ。たとえそこに植民地支配による「暴力」が介在していたのだとしても。

しかし植民地時代において、「台湾人」は「日本人」（＝「本島人」）であり、彼らは当時の「国語」＝「日本語」でも創作していた。この場合、創作言語と「国籍」は、「一致」していたわけだが、ここで生まれた文学は「日本文学」なのか、それとも「台湾文学」なのだろうか。また「台湾人」とともに、創作活動をしていた「日本人」（＝「内地人」）文学者の作品は、いったいどうなるのか。

筆者はこれらの作品群を、二者択一的にどちらかに振り分けたくはない。いい加減なように聞こえるかもしれないが、とりあえずカッコ付きの「台湾文学」であり、同時にカッコ付きの「日本文学」でもある、という曖昧な状態に宙づりにしておきたいのである。ただし便宜上、戦後の「中国語」による創作も含めて、本論ではこれらすべてを「台湾の文学」として記述することにする。これまで自明とされてきた国家と言語、国籍そして文学を等号で結ぶ、思考の惰性を撹乱させうる存在として、この地で表現された文学作品を考えてみたいのである。

2.「台湾の文学」と「中国文学」

ここでは「台湾の文学」と「中国文学」の関係に問題を限定して考えてみよう。この本のタイトルでもある「20 世紀中国文学」の中に、「台湾の文学」はどのように位置づけられるのだろうか。そもそも「台湾の文学」は――「上海文学」や「チベット文学」と同じような意味で――「中国文学」（「中国文学」とはそもそも何か、という根本的な問題は、ここではひとまず棚上げにしておく）の一部なのだろうか。

歴史的に見れば、日清戦争の結果、1895年に日本の植民地としての半世紀、そして日本の敗戦後は「中華民国」としてすでに半世紀以上の年月が流れている。この20世紀の100年間に、中国大陸と同一の政権下にあったのは、国共内戦から中華人民共和国建国に至る、わずか4年のことでしかない。さらに1987年に長期にわたる戒厳令が解除された後、民主化と同時進行した台湾化のなかで、自らの文学は中国文学の一部ではなく、独自の台湾文学なのだという意識が次第に広まりつつある。文学に限らず、歴史学や人類学など今日の台湾における「台湾学」の隆盛ぶりは、「台湾は中国の一部」という命題をはみ出すことが許されなかった戒厳令下においては、想像もできないほどだ。そして「台湾学」の成果は、例えば中学校の「認識台湾」がそうであるように、教育の場においても「台湾人意識」を昂揚させるよう機能している。

しかし台湾の統一を至上命題とする中国からみれば、「台湾の文学」は「中国文学の不可

分の一部」であるのは、議論の余地のないものとされる。中国で出版された各種の文学史[75]には、「台湾の文学」は中国文学の一環として論述されている。「台湾の文学」はそれを論じる者の立場によって、その位置が大きく変わってしまう存在なのである。

「台湾の文学」が中国文学の一部であるのか否かという問題は、文学史研究においては、「新」文学の起源をどこに求めるか、という論点に直結する。従来、台湾の新文学史を語る際には、北京に留学中の張我軍が五四以後の中国文学を紹介したことが強調されてきた。中国における文学史の記述も、この大枠をはみ出すものはない。しかし台湾においては、こうした「定説」にも異議が唱えられるようになってきている。例えば彭瑞金の『台湾新文学運動四十年』[76]は、張我軍の功績は認めつつ、台湾内部の社会変動にこそ新しい文学への端緒を見いだそうとしている。また台湾文壇の大御所葉石涛も、『台湾文学入門』[77]において、張我軍の「台湾文学は中国文学の一支流」という主張を、実行不可能な道だと一蹴するのである。

3．創作言語の転換

20 世紀の「中国文学」は、その初頭におきた「文学革命」によって、文言から白話へと創作言語が大きく変貌した。しかしその後は、左連期に「文芸大衆化論争」のなかで、白話をめぐる論争が展開されたものの、基本的には大きな変動はみられなかった。端的に言えば、30 年代の小説を今日の読者が「読めない」ということは、とりあえずないだろう。しかし台湾においては、事情が全く異なるのである。今世紀前半の日本植民地時代には、日本語が「国語」であった。とりわけ 1937 年以降、「皇民化運動」が強力に押し進められるなかで、中国語（白話）による創作には大きな制約が課せられ[78]、中国語で文筆活動を行ってきた「台湾人」作家の多くは、筆を折ることになった。これ以後の８年は「台湾人」作家も、基本的に日本語で執筆をせざるを得ない状況に追いやられたのである[79]。

ところが日本敗戦後、台湾を接収した国民党は、「台湾人」は日本によって「奴隷化」された存在と見なし、その文化再構築工作に着手する[80]。「光復」から一年後の 1946 年 10 月 25 日には、当局は新聞雑誌の日本語使用を禁じる布告を発表。こうした措置に対して、多くの「台湾人」が「それは本省人の耳目を封ずるに等しい」[81]と日文廃止反対の声をあげる。日本時代から文学活動を開始していた「アジアの孤児」の作家呉濁流も、次のような反対意見を表明した。

---

[75] 中国文学史のなかで初めて台湾文学を取り込んだのは、管見する限りでは北京大学の若手研究者による『中国現代文学三十年』（上海文芸出版社 1987．8）ではないだろうか。その後『二十世紀中国両岸文学史』（遼寧大学出版社 1988．8）など、台湾を意識した研究書が次々と刊行されるようになった。

[76] 彭瑞金「台湾新文学運動的起源」『台湾新文学運動四十年』（春暉出版社 1997.8）12～13 頁。

[77] 葉石涛「新旧文学論争与張我軍」『台湾文学入門』（春暉出版社 1997.6）19 頁。

[78] この時期の、新聞や雑誌における中国語は禁止されていたが、その措置が完全に行われたわけではないようだ。例えば雑誌『風月報』などでは、戦争期も中国語によって小説が掲載されている。野間信幸「張文環と『風月報』」啀唖之会編『台湾文学の諸相』（緑蔭書房 1998.9）を参照。

[79] 「台湾人」が日本語で創作した作品は、緑蔭書房から刊行された『日本統治期台湾文学台湾人作品集』全５巻（1999.6）によって概観できる。

[80] この問題に関しては、黄英哲『台湾文化再構築の光と影』、とりわけ第六章「文化再構築に対する台湾知識人の反応」（創土社 1999.9）が詳細に論じている。

[81] 雑誌『新新』の主張。前掲黄英哲 180 頁より再引用。

さて日文であるが日文がなぜ悪い、過古（ママ）［去］に於て武装されたからである。しかし今やその武装も解除されてしまつた。（中略）武装の解除された日文は文化の紹介を務める役割として大切なものである。殊に世界各国の文化が殆ど日文で訳されてゐる、日文一つ解すれば各国の文化に接することが出来る。（中略）私の考では政府機関紙の日文は当然廃止すべきであるが、その代り日文新聞や日文雑誌は過渡期と云はず永久に自由に発刊を許すべきものであると思ふ[82]。

しかしこうした訴えも空しく、日本語禁止措置は断行された。日本語で思考し、日本語を表現手段としてきた多くの台湾人文学者は、執筆活動を断念せざるをえなくなったのである。1925年生まれの鍾肇政は、日本語から中国語への言語転換を達成しえた数少ない文学者であるが、彼は中国語を創作言語として獲得する困難な過程を、このように振り返っている。

日本語でまず全文を書き、それを自分で中文に訳してやっと一つの作品を作製するわけです。そのような過程を経て、創作をおいおいとはじめました。そしてはじめの、いわば純粋な翻訳の段階から段々と熟練して、今度は考えることは今までと同じように日本語で考えて、同時に今考えついた一句の言葉を頭の中で中国文に訳す。翻訳した後、紙にそれを書き込む。つまり私のこの段階における執筆は、書き出した時にはそれがもう中国文でした。この段階を“訳脳”と言います。（中略）このような訓練をある程度積んでから、今度はいよいよ日本語を使わないで純粋に中国語を使ってものを考え、ものを見、そしてものを表すということを段々と覚えるようになりました。この時に至って私はどうやら中文をマスターし、日本文化の枷を解くことができるようになりました[83]。

1990年代以降、「台湾学」が盛んになっていることはすでに述べた。しかし現在の台湾人研究者にとって日本語は外国語であり、植民地時代の日本語文学を扱うのは、「外国文学」研究と似た困難がある。これは「中国人」が半世紀前の「中国文学」作品を扱うのとは、全く異なる事態であるはずだ。

しかも台湾の日本語文学は完全に過去のものではなく、今日もなお創作されつつある。数年前、朝日新聞の「折々のうた」で紹介され、話題を呼んだ「台湾万葉集」[84]がそれである。1926年に台北で生まれた編著者の孤蓬万里、本名呉建堂は、1968年に『台北歌壇』を創刊して以来、雑誌の主宰者として自らも多くの短歌を発表してきた。例えば次のような歌。

---

[82] 同前181頁より再引用。
[83] 鍾肇政「台湾文学について――『訳脳』の体験から」『台湾文学研究会会報10』（台湾文学研究会 1985.7）109頁。
[84] 孤蓬万里編著『台湾万葉集』（集英社 1994.2）、同『台湾万葉集【続編】』（集英社 1995.1）、同『孤蓬万里半世紀』（集英社 1997.9）

日本語のすでに滅びし国に住み短歌(うた)詠み継げる人や幾人

短歌とふをいのちのかぎり詠みつがむ異国の文芸(ふみ)と人笑ふとも[85]

「台湾人」の手によって「異国」の言葉で綴られた「異国の文芸(ふみ)」。「台湾の文学」は、既成の文学概念を突き崩すこのような作品を、今なお擁しているのである。

さて、この短文の最初の問いに戻ることにしよう。「中国文学」が「中国文学」であるための「必要条件」とは、いったい何なのだろう。「20 世紀中国文学」という枠組みの内実を、私たちは突き詰めて考えているのだろうか。

[85] 前掲『台湾万葉集』9～10 頁。